

問題1 Aの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。

▲金の^{きん}下駄^{げた}ト

かけて

①

のへど^{*}

ころろは^{*}

●
 ②

事
ない^{*}



*へど…一度食べて胃に入ったものを口から吐きもどすこと。また、その吐いたもの。
*…踊り字。前のひらがなを繰り返す符号。「ころろ」で「ころろ」と読む。
*な…もとの字は「奈」。

問題2 Bの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。

▲秋^{あき}の空^{そら}ト

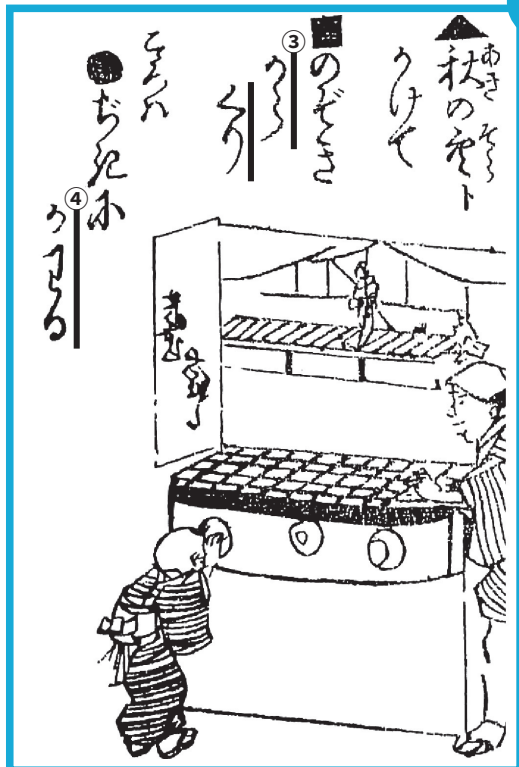
かけて

のぞき

③

ころろは^{*}
ぢきに^{*}

④



*き…もとの字は「起」。
*ぢきに…じきに（直に）。時間がたたないうちに。
*に…もとの字は「尔」。

問題3

Cの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。（注意…広いマスは漢字とふりがなです）

▲* あつもりの

⑤

かけて

■ ちりし花

心は

⑥

のこる

C



* あつもり…平敦盛 『平家物語』で源氏の武将熊谷直実に討たれた話は有名。

問題4

Dの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。（注意…広いマスは漢字とふりがなです）

▲ ゆふだち 夕立や田を

みめぐ 見廻りのト

かけて

⑦

辺の

色事

心は

⑧

を

する

D



* 夕立や田を見廻りの…「夕立や田を見めぐりの神ならば」。宝井其角の句。其角が三囲神社に立ち寄り、発句を捧げたところ、雨が降り出したという伝説がある。

解答

問題1:①「ゆうれい(由宇連以)」、②「はいた(者以多)」。

「▲金の下駄とかけて、■ゆうれいのへど、ころは、●はいた事ない」

問題2:③「からくり(可良久利)」、④「かわる(可王留)」。

「▲秋の空とかけて、■のぞきからくり、ころは、ぢきにかわる」

問題3:⑤「かたみ(可多三)」、⑥「青葉(あをば・安遠八)」。

「▲あつもりのかたみとかけて、■ちりし花、心は、●青葉のこる」

問題4:⑦「はま(者満)」、④「あま恋(こひ・己比)」。

「▲夕立や田を見廻りのとかけて、■はま辺の色事、心は、●あま恋をする」

教材について

ねらい:くずし字を学びながら、当時の社会・生活や古典のあり方、遊びを知る。

時間配分:トータル45分。授業時間:5分(くずし字の説明)

問題を解く時間:20分(問題1・2)、20分(問題3・4)

題3・4)

対象教科:国語、社会、書写・書道

問題解説

今回扱った問題は昔の謎かけです。謎掛けは言葉遊びの一種、出典の本では、▲で謎を掛けて■で解き、●で両者の共通点を説きます。「〜とかけて〜とく、その心は?」というフレーズは有名ですね。

問題1はまず、「金の下駄」とかけます。金

でできた下駄、ありえないですよ、現代だと金で靴を作るようなものです。では何と解くのか。ヒントになるのが絵です。三角巾を頭に付けていて、足がありません。そう、①は「ゆうれい(幽霊)」が正解です。「う」と「い」

は普段使用しているひらがなと同じ形ですね。「ゆ」はもとなった漢字は現代の字と同じ「由」です。しかし、くずし字では最後の一画が雷(⚡)のように書かれる形が多いです。次に、「れ」は「連」という漢字がもと

です(現代の字は「礼」がもとです)。通して読むと幽霊のへど(反吐)となります。では、金の下駄と幽霊の反吐の共通点は何でしょう。②の正解は「はいた」です。「は

は「者」がもとの字です。漢文で「者」を「は」と読ん

だりしますね。「た」のもとの字は「多」、「さ」の横線がない形と認識すると覚えやすいです。通して読むと「はいた事ない」となります。

金で作られた下駄を履くか、幽霊が食事をして食べたものを吐くか、「はかない」ですよ。つまり問題1は、金の下駄も幽霊の反吐も「履いた・吐いた」事がない、

と同音異義語を共通点とするわけです。だとすれば、絵で幽霊が吐いたように見えるのは人魂でしょうか。当時の幽霊観が伺えて面白いですね。

問題2。まず「秋の空」とかけます。移ろいやすい秋の空を何と解くのか。③の初めの字はもとの字が「可」の「か」、直前の「かけて」と同じ形です。次の「ら」は現代と同じ「良」がもとの字ですが、一画目の点が省略されることが多いです。「くり」は現代と同じ字です。■を通して読むと「のぞきからくり」となり

ます。覗きからくりは「箱の中に、物語の筋に応じた幾枚かの絵を入れておき、これを順次に転換させ、箱の前方の眼鏡を通して覗かせる」(『広辞苑』)見世物で、大変人気がありました。そしてこれも絵がヒントになります。

覗きの箱は忠実に描かれており、箱の前にある穴から中の絵を覗く子どもや、傍に口上人(興行などで、題、役割、出演者などを紹介する人)がいる様子からも、覗きからくりと知れます。では秋の空との共通点は何でしょう。「ぢきに」は「じきに」です。昔は音が合えばよい面がありました。④の一字目は先に出てきた「か(可)」、次の字は「王」がもとの字の「わ」です。王はワンと読んだり

しますね。「る」のもとの字は「留」、これも現代の字ともとは同じですが、一画目が省略、小さめに書かれることが多いです。通して読むと「直にかわる」となります。つまり問題2は、天氣がコロコロと変わりやすい秋の空(愛情が変わりやすいことを「男(女)心と秋の空」と言ったりしますね)と、中の絵をどんどん転換させる見世物「覗きからくり」の共通点として、共に「直に変わる」という事象を説くわけですね。

問題3。問題3。「あつもののかたみ」とかけます。あつもりとは平敦盛のこと。『平家物語』で戦の前夜に笛を吹いていた風流な若者の武士で、源氏の熊谷次郎直実に討たれたことで有名ですね。⑤の「か」は可、「た」は多、

「み」は三が字母です。「かたみ」は形見のこと、『平家物語』に直実が敦盛を討った後、笛を見つけるという場面が描かれるように、挿絵を見ても手に笛を持っている。つまり、形見とはこの笛を指します。そして、「ちりし花」、これは散った花という意味です。では何と解くのか、⑥は漢字で読みにくいかもしれませんが。そこでふりがなを見て推測します。ふりがなには「あ(安)」、「を(遠)」、「ば(八に濁点)」とあるので、「青葉」と想像でき、「青葉のこる」となるわけです。お花見の季節を終えて花が散った後、木はどうなっていますか、葉が青々として、青葉が残る様子が思い浮かびますね。では、この青葉と敦盛の笛はどう関わるのでしょうか。実は平敦盛の笛の名称が「青葉の笛」といわれています。『平家物語』の本文には出て来ませんが、例えば謡曲「敦盛」や江戸時代の歌舞伎『一谷嫩軍記』などでは、敦盛の笛の名前が「青葉」です。江戸時代の人々は、原作の『平家物語』からよりも演劇などからその伝承を知っていました。現代の感覚で言うと、NHKの大河ドラマで内容を知ったというような感じでしょうか。

つまり、敦盛の形見として「遺」ったのが「青葉の笛」で、花が散った後に「残」るのが「青葉」というわけです。一方は笛の名前、もう一方は実際の青々とした葉なわけですね。これは敦盛の笛の名前を知らなければ解けません。江戸時代の人々が演劇を通して、敦盛が遺した笛の名前に慣れ親しんでいたことがわかります。

問題4 問題4のかけることばは、少し難しいです。「夕立や田を見廻りの」とかける、これだけだとなかなか意味が通じませんよね。実はこの「夕立や」は注にもある通り、「夕立や田を見めぐりの神ならば」という宝井其角という俳人の句です。其角は芭蕉の門人で蕉門の筆頭と目された人物でした。この其角の句の一部が掛けられているわけです。そして何と解かれているのか、⑦は「は(者)」と「ま(満)」です。続けて読むと「はま辺の色事」となります。漢字で書くと「浜辺の色事」、挿絵にも浜辺で紙を持つ女性が描かれていますが、「色事」は男女間の恋愛の意味ですから、紙は恋文(ラブレター)でしょう。其角の句と浜辺の女性の恋愛とがどう関わるのでしょうか。⑧は現代のひらがなと字母は同じです。漢字

と共に連綿(れんめん)体で書かれているので読みにくいかもしれませんが、⑧は「あま恋(こひ)」です。続けて読むと「あま恋をする」となります。浜辺の女性といえは「海女(あまこひ)」さんですね。二〇一三年にNHKで『あまちゃん』が放映されましたが、海女さんは海に潜って貝や海藻を採ることを仕事とする女性ですね。「海女、恋をする」となるわけです。一方、其角の句がどう関わるかと言いますと、この句は『五元集』(延享四年(一七四七)刊)という俳諧集に収録され、日照り続きのある時、三囲神社で「請雨(しょうう)の祈願」が行われており、其角が句を詠むと雨が降ったと記されます。すなわち、この句は「雨乞い」の句であり、「海女が恋をする」と「雨乞いをする」とが掛かるということですね。

この問題も問題3と同様に、其角の句について知っていなければまず解けない謎でしょう。しかし、其角の句の一部を聞けば即座に「雨乞い」とわかる素地が、江戸時代の庶民に備わっていたと、この謎から確認することができます。其角の雨乞いの句と海辺の恋愛の共通点として、「あまこひ」ということばを選択するところに、



『新撰なぞくし』の一部
国文学研究資料館蔵
(DOI: 10.20730/200012624)

江戸時代の人々の文学への身近さが感じられます。なお、この謎かけは『新撰なぞくし』という本にも見られます(「夕立や田を見めぐりの神ならば」とかけて、海べのいろごと、ととく。心は、あまこひをする」)。

本書は『謎解説秘伝』(底本は三宅宏幸所蔵本)と題された近世後期から明治あたりに出版された本です。全二〇頁、一頁につき四つ、総計で全八〇の謎が掲載されます。当時の社会や生活の知識を題材としたものだけでなく、古典の知識を踏まえた謎かけも収められます。

(担当: 三宅宏幸)